

完結した美しい終焉

星永文夫

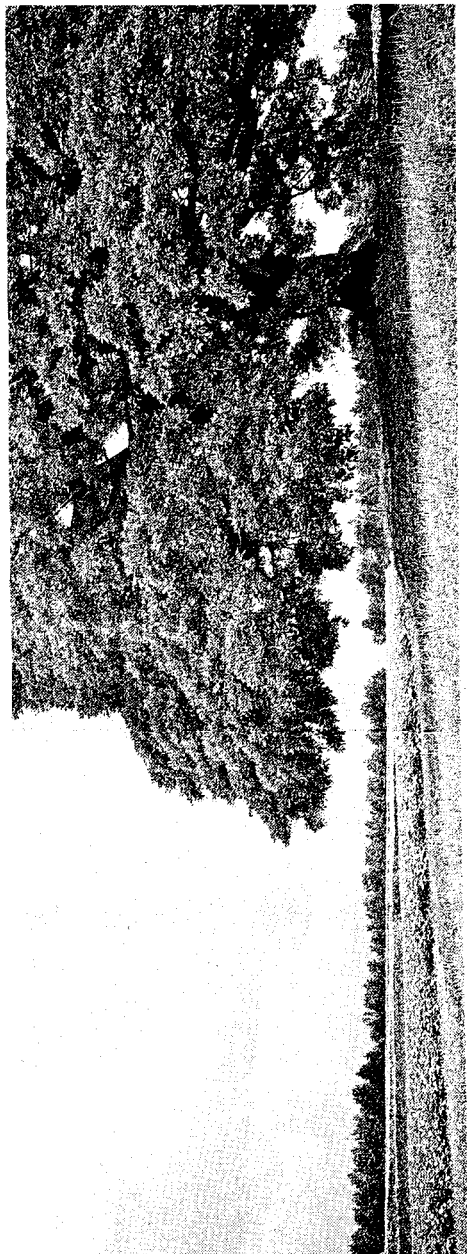
を重ねたという。その輝かしい画業七十年が、私の知る人であった。その人が、俳句を始めたといわが門を叩かれたとき

るころ病床に就かれ、今六月一日に逝去。画業全うし、その上に俳句歴年を重ねて、まことに豊かな生涯であったと思う。

想

父と考古学

百番。不登校になった。そのころ高木恭二という考古学者と出会った。彼の目は、学問の話になると鋭く輝き、学者の目はこんなに美しいものかと感じた。宇土市役所に勤務しながら、地元石棺が畿内に運ばれたことを「石棺輸送論」という論文で証明した頃だった。私に考古学の本



Tree I 2006 (撮影・宮井正樹)

私事だが、五月に父が七十三歳で急死した。私は四十四歳の今まで父が重植で仕方がなかった。父は鏡町(現・八代市)の有佐駅近くで雑貨店をやっていたが、毎日奇行の繰り返しであった。夏はパンツ一枚で単車に乗って煙草の配達をする。線路の傍で通る電車に向けて毎朝立ち小便。家の前に植えたカボチャに向かって小便もした。

小学校六年のときだった。隣の組の男子が担任の女性教師に「かぼちや食わんか。澤宮のおっさんが小便かけて栄養のついとるけん旨かばい」と教室まで持参した。カボチャは丸々としていた。教室では一同爆笑。そこには片思いの女の子もいた。それまで外向的な少年が自我に目覚める頃に、他人を信じられず、内向の性格へと転じた。

そんな中、自分を慰めてくれたのが古墳や貝塚だった。そこで感じたものを文章に綴る。今思えば私の物書きへの執着はここから始まった。高校は、考古学で有名な宇土高校を選んだ。校外だから父のことで罵鹿にされないだろう、ということも計算もあった。しかし父の奇行で疲勞困憊の私の高校時代の成績は学年で三

ノンフィクション作家

澤宮 優

を貸してくれ、拙い質問にも丁寧に答えてくれた。「君は考古学の道では大成するよ」と励ましてくれた。それは大きな支えになった。

二年間の浪人生活の中で、私は考古学よりも人の生き様を書きたいと思うようになった。日の当たらない場所で一生懸命生きる人を描くことで、私と同じように苦しむ人たちに、「生きることは決して無意味ではない」と伝えたい。それを自分にも言い聞かせたかった。だが文才のない私には至難の業であり、世の中はそんなに甘くはなかった。高校時代に煩った強迫性障害で、日々ただ苦しい生活だった。

それでも二十年間、没原稿を書き続け、三十代の終わり、多くの出版社に断られながらもやっと一冊の本を出すことができた。それは戦死した巨人の名捕手・吉原正喜の伝記だった。近作『プロ野球いぶし銀のベストナイン』も、派手さとは無縁に、基に生きて選手たちを描いたルポである。

そして今回、高木が継体大王の古墳から馬門石を発見するまでのルポを書いた。彼は大学で考古学を専門に学んで

おらず、独学で自らを上げた人物。彼の学問への情熱と苦しみながら発表する過程を追った。彼が発見した石棺のすばしけさを見て回った。

「昨日、若い世代の犯している。その方法を極める。だが、彼の温かい視線が向けられる時、彼らは孤独から救済することができるのではない。私のものを書き意義は尽きる。日の当たらないちが精一杯生きる姿を、とて、悩みを抱える若者に、世の中様々な生き方、どんな人生にも失敗、いことを伝えたい。私まで出会った野球選手に、人生における可能性があるのである。

私の弱いペンがその力を持つようになる。自信はないが、私にできることは書き続けるだけだ。火葬直前の安らかな顔を見て、そう誓った。運を弱者で送った父。私が幼い頃、古墳に運び、歴史への関心を作られたのは実は父であった。度々憎しみあつた父と、いだのは奇しくも考古学だった。

◇さわみや・ゆう 1964年生まれ。八代市(旧・八代郡鏡町)生まれ。青山学院大文学部、早稲田大第二文学部卒業。大職員として勤務する。取材・執筆活動を続ける。高木氏を取り上げた最新刊『1000キロの海を渡った』『大王の棺』は現代書館から刊行。

◇みやい・まさき 1971年生まれ。九州学阿蘇郡西原村生まれ。父・宮井政院高卒。写真家の父・宮井大次氏より写真学を学び、主に大型カメラによる作品を制作。熊本市現代美術館の「ピクニック」(7月)に出品。